

日本ギヤスケル協会

第 36 回大会

2024年10月5日（土）13時00分より 於・日本大学文理学部本館1階ラーニングコモンズ
〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

13:00～13:05 開会の辞

日本ギヤスケル協会会長 閑田 朋子（日本大学教授）

総合司会 村上 幸太郎（宮崎公立大学准教授）

13:05～13:35 研究発表1

司会 閑田 朋子（日本大学教授）

「ギヤスケルの物語として読む『北と南』——信仰とやさしさに支えられて」

柏木いずみ（日本大学大学院博士後期課程）

13:35～14:05 研究発表2

司会 加藤 匠（明治大学兼任講師）

「ギヤスケル作品とユニテリアン女性作家の伝統」

太田裕子（慶応義塾大学非常勤講師）

14:05～14:15 Break

14:15～15:55 シンポジウム

「19世紀イギリスにおける共感」

司会・パネリスト：松浦 愛子（名城大学准教授）

パネリスト：石井 明日香（東京学芸大学非常勤講師）

パネリスト：矢嶋 瑠莉（千葉工業大学非常勤講師）

15:55～16:05 Break

16:05～16:35 総会

16:35～16:40 奨励賞表彰式

16:40～17:40 講演

司会：西村 美保（名古屋学院大学教授）

「ギヤスケルのマンチェスター」

大田 美和（中央大学教授）

17:40～17:45 閉会の辞

日本ギヤスケル協会副会長 松本 三枝子（愛知県立大学名誉教授）

*懇親会 18:00～20:00 於・居酒屋たつみ 会費 3000円

本大会に関する問い合わせ：日本ギヤスケル協会事務局 E-mail:yurikohayakawa@otsuma.ac.jp

〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地 大妻女子大学文学部英語英文学科 早川友里子研究室

研究発表

1. 「ギヤスケルの物語として読む『北と南』 — 信仰とやさしさに支えられて」

柏木いずみ（日本大学大学院博士後期課程）

本発表は、『北と南』（1855）に、ギヤスケル自身の個人的な経験がどのように反映されているのか考察するものである。『北と南』は従来、社会問題小説、あるいは、主人公マーガレット・ヘイルの成長物語として捉えられてきた。しかしながら、ギヤスケルは、家族の死に接した時、また母親として育児にあたるなかで、他者から差し伸べられるやさしさと信仰に支えられ、そのような自身の経験から得たものを、マーガレットと彼女が関わりを持つことになるジョン・ソーントンの母子関係に反映させたのではないだろうか。本発表では、まずギヤスケルが理想とする母親像が、信仰に根差したものであることを考察し、次に、マーガレットとジョンが、労働者ニコラス・ヒギンズとの交わりを通して、ギヤスケルが体得したやさしさを実践する様子を見ていく。『北と南』が、ギヤスケルの人生の軌跡が埋め込まれた、ギヤスケルの物語でもあることを明らかにすることにより、ライフ・ライティング研究の視点に立った新たな作品解釈を目指したい。

2. 「ギヤスケル作品とユニテリアン女性作家の伝統」

太田裕子（慶応義塾大学非常勤講師）

ギヤスケルに深い影響を与えたユニテリアン主義は男女同権を支持し、個人の尊厳と平等を重視する思想から、歴史的にも男女平等や女性の権利を推進してきた。とりわけ18世紀末から19世紀にかけて活躍したユニテリアン主義の女性作家の果たした役割は大きかったと言われる。ギヤスケルの作品でも *Ruth* (1853)、“Half a Lifetime Ago” (1855)、*My Lady Ludlow* (1858)、などでは社会でその実力を発揮して働く女性が描かれ、女性の教育や社会的役割の重要性が示されているが、そこには社会問題に対する批判や改革の必要性を共有したユニテリアン女性作家の影響があろう。

そこで今回の発表では、ユニテリアン女性作家の先駆者であり、ギヤスケルも幼い頃より読んだと言われる Anna Barbauld (1743-1825)、更にユニテリアン主義に深く影響を受けた Mary Wollstonecraft (1759-97) の児童文学を含む作品とギヤスケルの作品との関連性を探り、ギヤスケルがどのようなユニテリアン思想を継承し、発展させていったのかを論じ、多角的なギヤスケル作品解釈を目指したい。

シンポジウム

「19世紀イギリスにおける共感」

『北と南』はじめ、ギヤスケルの作品において、共感は重要な役割を果たしている。産業革命下のイングランドでの南部と北部の対立が背景にある『北と南』では、主人公のマーガレットと工場主ソーントン、工場主と労働者との間に生じる摩擦が、共感と理解によって解消され、新たな理解と協力関係が築かれる。ギヤスケルの作品全般においても同様に、共感が登場人物たちの葛藤や困難を通じて解決の糸口を示し、社会的な調和や変革を模索する。共感単なる感情の共有を超え、相手の立場や状況を深く理解しようとする思いやりの姿勢を象徴する。

共感が持つ潜在的な力を理解し、より包括的で共感のある社会を目指すための現代社会への示唆を、ギヤスケルの描写から得ることができるのではないだろうか。このシンポジウムでは、ギヤスケルの描く登場人物たちの経験を通じて、19世紀イギリスにおける共感を考察し、共感の重要性と現代社会への応用可能性を探求する出発点を提供したい。

司会・パネリスト：松浦愛子（名城大学准教授）

『北と南』における共感の役割：19世紀イギリスの共感と現代日本社会への示唆

松浦愛子（名城大学准教授）

ギヤスケル研究者の多比羅眞理子氏は、編著書『エリザベス・ギヤスケル—孤独と共感』において、あらゆる人間にむける「慈愛」を、ギヤスケルがもつ「人々への篤い共感の心」とし、現代社会が直面する精神的荒廃への救済とみた。特に、『北と南』の労働者ヒギンズを例に、「共感」が偏見と誤解を解き放つことを指摘し、ギヤスケルの共感を現代社会の問題解決への示唆とした。

2026年にギヤスケル協会が『北と南』の新訳を刊行予定であることを踏まえ、本発表では、共感に関する理論的な枠組みを振り返りつつ、作品内の共感の描写を取りあげる。また、『北と南』において、共感が異なる社会階層や地域、思想の違いを超えた架け橋としてどのように機能するかを分析する。さらに、本協会の新訳版が日本の読者にもたらす共感体験と理解に焦点を当て、ギヤスケル文学がもつ文化的多様性や現代の社会課題に対する示唆を探る。これを通じ、『北と南』の新訳の刊行が現代の日本社会に提供する可能性を探るとともに、共感が持つ社会的な変革への潜在的な力の理解を深める機会としたい。

「共感からケアへ—『ルース』における「自分だけの部屋」

石井明日香（東京学芸大学非常勤講師）

本発表では、『ルース』に描かれる共感とケアの可能性について論じたい。他のギヤスケル作品同様、『ルース』においても、立場の異なる相手への共感、そしてケアの可能性が描かれているが、優しさや聡明さの他、自分一人になれる時間、いわば「自分だけの部屋」があって初めて他者への共感が可能になるのだということが示唆されている。ルースはもちろん、他の登場人物にも「自分だけの部屋」が与えられるわけではない。ただ、自分では気づかなくとも、自分の感情に身を任せることができる時間が与えられたとき、それが他者への理解と共感につながることもある。作品中では相手への共感が可能になる場合とならない場合、共感が相手の救済につながる場合とつながらない場合など、さまざまなケースが描かれるが、共感が可能になるためには「自分だけの部屋」は大切な要素である。「自分だけの部屋」は引きこもり、他人とのかかわりを否定する場ではなく、一人になることで、共感と、互いに依存しないケアを可能にする場なのである。『ルース』に描かれるケアは共感を伴う、自立につながるケアである。以上の観点から、ルースが最後に死ぬことの意味も考察する。

「家庭の天使」像からの脱却——ギヤスケルの持つ女性の多様な生き方への共感

矢嶋瑠莉（千葉工業大学非常勤講師）

現代は「多様性」の時代であり、それを認める風潮は社会にだいぶ定着し始めている。だが、国や社会や民族の中で既存の価値観となっているものを覆し、新しい考えや価値観として認めることは現代においてもなかなか容易ではない。多様性を認める第一歩となるのは、それらに対する「共感」である。

ギヤスケルの作品には様々な生き方をする女性たちが描かれる。独身の余った女たちが牛耳る『クランフォード』、墮ちた女から未婚の母として生きる女性を主人公とした『ルース』、聡明で男勝りな女性の成長物語である『北と南』に代表されるように、ヴィクトリア朝の規範とされる家庭の天使像から逸脱したタイプの女性たちも、ギヤスケルの作品では堂々と主人公の座に着いている。これは、(余った女、墮ちた女、男勝りの女などの)家庭の天使とは対極の性質の女性に対するギヤスケルの「共感」を示すものであって、父権社会が決めた家庭の天使やレディとしての生き方に縛られない「多様な生き方」を提唱していることに他ならない。長編『クランフォード』、『ルース』、『北と南』を主軸に書簡も取り上げ、ギヤスケルの「女性の多様な生き方」に対する共感を考察する。

講演

「ギヤスケルのマンチェスター」

大田美和（中央大学教授）

2023年に英国のマンチェスターに三か月あまり滞在しました。現在のマンチェスターには工場も貧民街もなく、エリザベス・ギヤスケルのマンチェスターの面影はありませんが、いろいろなイベントや展覧会などを通して、ギヤスケルの時代に通じるような、マンチェスターに生きる者のプライドと、マンチェスターが歴史的に果たすべき役割についての強い自覚を感じ取ることができました。それは、紡績業による富の蓄積と文化の発展が奴隷貿易や植民地主義に立脚していたことを見つめながら、様々なルーツを持つ新旧の移民の住む町でより良い未来を作るために、専門家も市民も手を取り合って進んでいくというものです。

ハリー・ポッターのロケ地として有名なジョン・ライランズ図書館、ウィリアム・ギヤスケルが会長を務めたポーティコ・ライブラリー、緑豊かなパークを持つウィットワース美術館、エリザベス・ギヤスケルハウス、人民の歴史博物館、ハレ管弦楽団の本拠地ブリッジ・ウォーターホールなどで見た展示や、参加したイベントを紹介しながら、首都ロンドンとも、学都ケンブリッジやオックスフォードとも異なる、マンチェスターの魅力についてお話ししたいと思います。

アクセスマップ

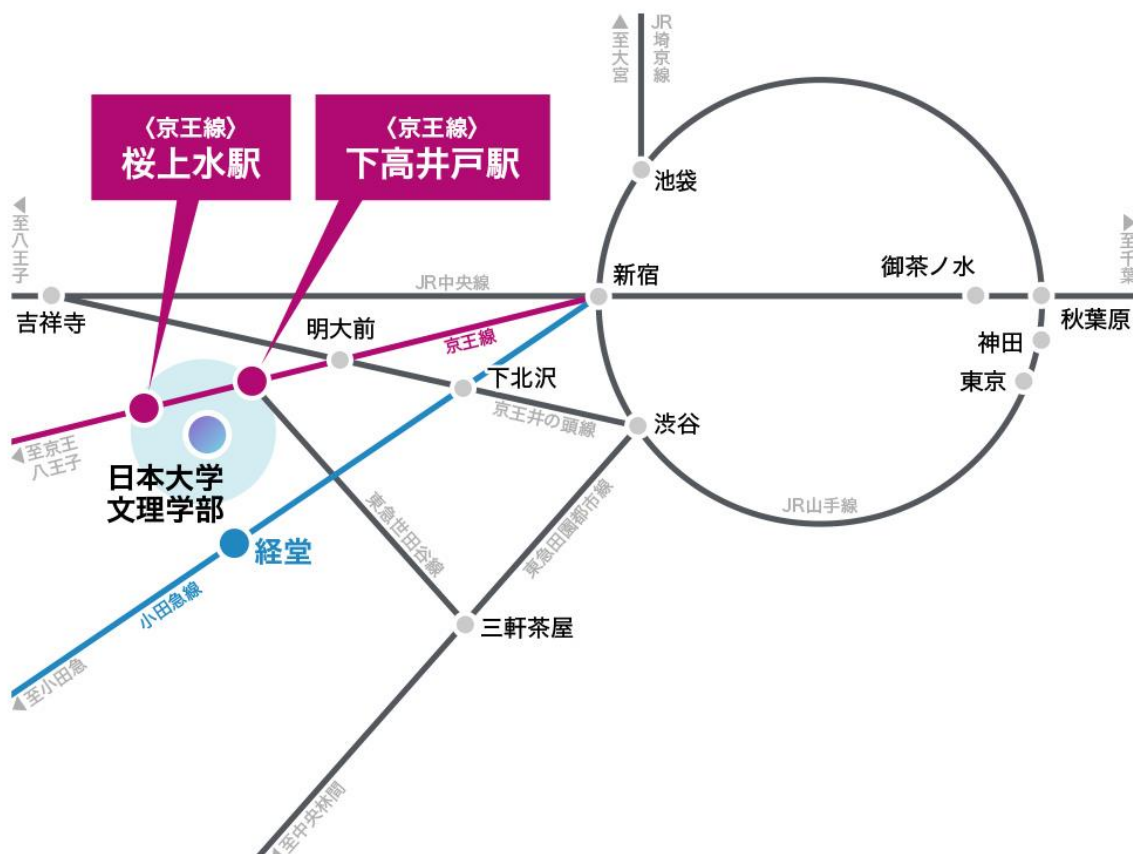
大会会場

日本大学文理学部本館一階ラーニングcommons

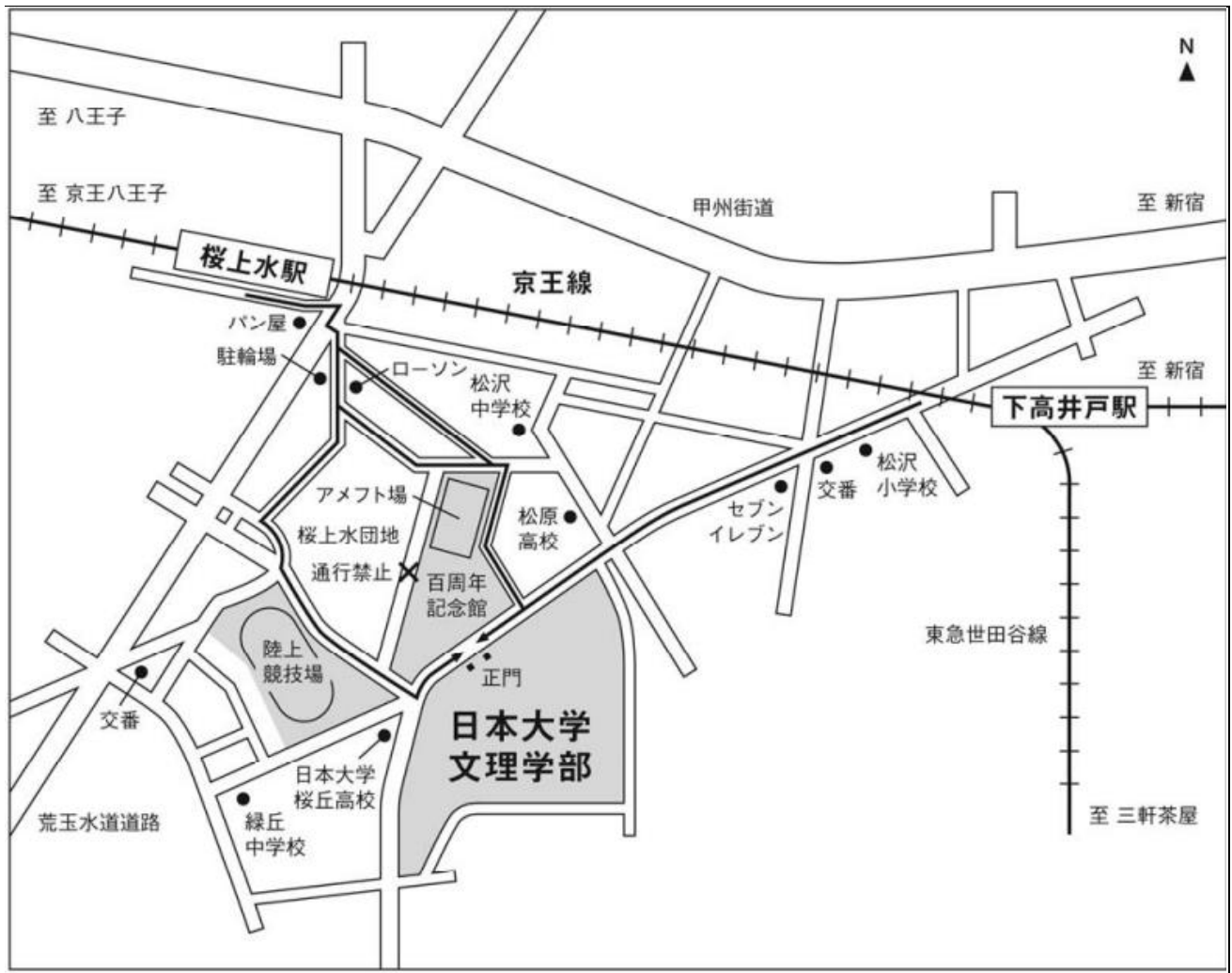
〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

アクセス

- ・東急世田谷線 下高井戸駅 下車 徒歩8分（新宿・渋谷から10～12分）
- ・京王線 桜上水駅（急行停車駅）下車 徒歩8～10分（新宿・渋谷から10～12分）
- ・小田急線 経堂駅 下車 徒歩20～25分（新宿・渋谷から13～17分）



最寄駅からのアクセス



懇親会場

居酒屋たつみ 世田谷区赤堤 5-31-1

京王線 下高井戸駅南口から日大に向かって徒歩4分 日大通り交番の斜向かい